

理学部附属 植物園のいきものたち 第27回 イヌカラマツ/チャンチンモドキ

「イヌカラマツはですか」。村田源先生(元京都大学理学部植物学教室講師)にお会いすると、京大植物園のイヌカラマツの様子を尋ねられます。今月は、そのイヌカラマツ(*Pseudolarix amabilis* (Nels.) Rehder、写真1-3)とチャンチンモドキ(*Choerospondias axillaris* (Roxb.) Burt et Hill、写真4-6)という京大植物園の象徴を紹介します。

イヌカラマツはマツ科イヌカラマツ属、チャンチンモドキはウルシ科チャンチンモドキ属の植物です。かたや裸子植物、かたや被子植物ですが、両者には共通の特徴があります。起源が古く第三紀鮮新世には東アジア、東南アジアに広く分布していたこと、現生では近縁種がなく1属1種であること、イヌカラマツは現在の日本には自生せず、チャンチンモドキの分布は熊本と鹿児島のみ、というように分布域が狭くなっていること、などです。

京大植物園の樹木の多くは、こうした地質年代レベルの気候変動と植物の分布の変遷をふまえて植栽されています。園内のイヌカラマツは、三木茂先生が中国の杭州より持ち帰ったものです。チャンチンモドキは、小泉源一先生が九州から持ち帰ったものが複数と中尾佐助先生がネパールから持ち帰ったものが植えられています。

イヌカラマツは京都一円を見渡しても植えられていないのですが(村田氏談)、それでも園内で結実したくさんの球果がみられます(写真2)。種子は発芽能力を有しており、実生を見ることができず(写真3)。なぜ1本で繁殖できるのかと疑問がわきます。村田先生の言葉のとおり、実際に育て観察しなくては植物の生き様は知り得ないのだと痛感します。



▲写真1



▲写真2



▲写真3

チャンチンモドキは雌雄異株で、1本の木には雄か雌かどちらかの花しか咲きません。園内には雄も雌も複数あるので、毎年多数の果実と実生が見られます(写真5, 6)。現在もネパールでは果実を食材として利用するそうで、京都のネパール料理屋さんが植物園まで集めに来られたそうです。日本では、吉野ヶ里の縄文遺跡で種子が大量に見つかり、井戸の羽目板がチャンチンモドキの材ということです。現在はほとんど自生地がないので、保育社や平凡社の植物図鑑でも京大植物園と小石川植物園での写真が多く使われています。鹿児島県の自生地ちかくを郷里とする友人は、屋久島から京大植物園までわざわざ見に来たそうです。



▲写真4



▲写真5



▲写真6

今年8月、イヌカラマツ周辺でタケの地下茎の伸長防止と銘打った工事が行われました(写真7)。イヌカラマツの歴史をふまえて気遣っていただけたかと、不安を感じています。次に村田先生にお会いしたとき、きちんとお答えできるよう、個人的に観察していくつもりです。



▲写真7